

山梨県甲府市方言における終助詞「さ」の機能について*

水石すみれ

smrst06@gmail.com

キーワード：甲府市方言 終助詞 さ 提示用法 確信用法

要旨

山梨県甲府市方言には、共通方言とは異なる2つの終助詞「さ」の用法、すなわち、提示用法と確信用法が存在する。本論文では、まずそれぞれの用法の形態統語的特徴、機能的特徴、語用論的効果について明らかにする。そしてその共通点と相違点をまとめたうえで、2つの「さ」の間に同一形態素で認めるに値するほどの関連性や意味のつながりが見られないこと、明確な相違点が存在することを根拠に、2つの「さ」は異なる形態素であると主張する。

1. はじめに

山梨県甲府市方言では、親しい人物との会話において終助詞「さ」が文末に多用される。その用法は2つあり、どちらも共通方言の終助詞「さ」の用法とは異なっている。実際の用例を下記(1)と(2)で確認する。各例の下の方の[]内には、共通方言による意味を示す。

(1) 提示用法

なんかすごい褒められちゃったさ
[なんかすごい褒められちゃったんだ]

(2) 確信用法

A 「これ燃えるゴミでいい？」
B 「いいさ」
[いいにきまってる]

上記(1)では話し手が「自分が褒められた」というエピソードを聞き手に提示しているのに

* 本論文は筆者の卒業論文(東京大学文学部; 2022年1月4日提出)に加筆修正したものである。本論文の執筆にあたっては、以下の方々に謝意を示したい。調査に協力してくださった5名の話者の方々には、忙しい中快く調査に応じていただいた。指導教員の長屋尚典先生には、本論文執筆の構想段階から執筆完了の直前まで大変熱心なご指導と数々の的確なアドバイスをいただいた。研究室の先生と先輩方、特に、鈴木唯さん、谷川みずきさん、林真衣さん、諸隈夕子さん、吉田樹生さんには、内容や構成に関して大変多くのコメントをいただいた。同級生である河野旭彦さん、小熊志歩さん、中山文月さん、服部信吾さん、渡辺拓実さんには、アウトラインの段階から多くのコメントやアドバイスを寄せていただいた。なお、本論文の文章に関する責任はいうまでもなくすべて筆者にある。

対し、(2B) では A からの問いかけに対し、「(燃えるゴミで)いいにきまっている」「当然そうである」という B の強い確信を A に示している。本稿では、例文 (1) のような用法を「提示用法」と呼び、例文 (2) のような用法を「確信用法」と呼ぶこととする。

自分の経験やエピソードなどの情報を「聞き手が知らないだろう」と考えて提示する提示用法と、「それは当然のことである」と考えて情報を提示する確信用法とでは、用法が全く異なるようにみえる。それにもかかわらず、同音の「さ」を用いている点が興味深い。

しかし、甲府市方言の終助詞「さ」を中心的に扱った先行研究は存在していない。全国の方言文末詞を網羅的に扱った藤原 (1985) でも、山梨県下における「さ」の実例とそれに対応する共通方言の訳が 4 例挙げられているに留まっており、それ以上の詳しい分析はなされていない¹。

甲府市方言の研究だけでなく、共通方言の終助詞研究全体を見ても、終助詞「さ」は終助詞「ね」や「よ」と比べて分析が困難であることや、それにより「さ」を中心に扱った論考が少ないことが、富樫 (2011) で指摘されている。本稿で甲府市方言と共通方言の「さ」を比較することはしないが、両者には多くの共通点も見られるため、甲府市方言の終助詞「さ」について研究することで、共通方言の終助詞「さ」の研究や終助詞全体の研究にも貢献があると考えている。

本稿の問いは、提示用法の「さ」と確信用法の「さ」が同一形態素であるか否かである。この問いに答えるため、「さ」の形態統語的特徴、機能的特徴、語用論的效果を明らかにしながら、同音で表される提示用法の「さ」と確信用法の「さ」の共通点と相違点についてまとめる。そしてその共通点と相違点をもとに、最終的に、本稿の分析においては両者が異なる形態素であるということを示す。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 節では山梨県の方言区画および甲府市方言の概観を述べ、第 3 節では本稿の記述を行うにあたって用いた方法について述べる。第 4 節では提示用法と確信用法の「さ」の形態統語的特徴について分析し、第 5 節ではその機能的特徴と語用論的效果について分析する。第 6 節では、第 4 節と第 5 節を踏まえて提示用法と確信用法の「さ」の共通点・相違点を導き出し、そこから両者が異なる形態素であることを示す。最後に第 7 節でまとめを行う。

2. 甲府市方言の概観

第 2 節では、先行研究に基づいて山梨県の方言区画について記述し、本稿で扱う甲府市方言は山梨県西部方言のうち峡中方言の一部であることを説明する。

まず山梨県の方言は、県の東部を南北につらなる大菩薩・御坂山系を境に、東部方言と西部方言とに二分される (嶺田 2005)。吉田 (2014) によると、西部方言域内の早川町奈良田集落の

¹ 例えば「ソーサ。ムリサ。」という実例の下に「そうだよ。むりだよ。」という共通方言訳がつけられているが、それ以上の分析はなされていない。

ことばは、その音声とアクセントの特異性から言語島と位置付けられるため、方言区画としては東部方言、西部方言、奈良田方言の3つに分けられるという。吉田 (2014) に従って山梨県の方言区画を表した図として、図1を参照されたい。図1は吉田 (2014) をもとに筆者が作成した。国土地理院が作成した地図に、方言名、周辺の都県名、東部方言と西部方言の境界を加え、山梨県と周辺の都県との境界線を太くしたものである。



図1. 山梨県方言区画図 (吉田 (2014) をもとに筆者が作成)

出典：国土地理院

さらに、吉田 (2014) によると西部方言と東部方言はそれぞれ以下のような小区画に分けられる。

<西部方言>

- ①北巨摩地方の方言 (峡北方言)
- ②富士川流域の河内方言 (峡南方言)
- ③甲府盆地東側地域の東郡方言 (峡東方言)
- ④甲府盆地西側地域の西郡方言 (峡西方言)

⑤甲府市を中心とする中郡の方言（峡中方言）

＜東部方言＞

⑥郡内北部の方言（東部方言）

⑦郡内南部の方言（富士方言）

本稿で扱う甲府市方言とは、山梨県西部に位置する甲府市で話されている方言のことを指し、吉田 (2014) の分類に従えば、峡中方言の一部であるといえることができる。

終助詞「さ」は甲府市以外の近隣の地域でも用いられていると考えられるが、今回は調査の行いやすい筆者の生育地である甲府市を対象を絞って調査を行い、甲府市方言についての記述を行うこととする。今回の研究は終助詞「さ」の基本的な記述が目的であり、地域差を考慮した研究ではないためである。

3. 方法

第3節では、本稿における記述にあたって用いた調査方法について述べる。本稿における記述は、甲府市出身・生育者である筆者の内省と、5名の甲府市出身・生育者に対する聞き取り調査に基づいている。筆者および調査協力者の話者情報については、表1を参照されたい。表1では、話者IDと性別、年齢のほか、居住歴（年齢と合わせた居住地情報）を示している。なお話者Fについては、年齢も合わせた居住地情報は得られなかったため、居住地のみを記している。

表 1. 話者情報

話者 ID	性別	調査時年齢	居住歴
A ²	女性	21	0-18：山梨県甲府市，18-21：東京都新宿区，21-調査時現在：東京都中央区
B	男性	21	0-18：山梨県甲府市，18-19：東京都杉並区，19-調査時現在：東京都北区
C	女性	21	0-6：山梨県中央市 ³ ，6-18：山梨県甲府市，18-19：東京都練馬区，19-調査時現在：東京都世田谷区
D	女性	31	0-18：山梨県甲府市，18-22：東京都三鷹市，22-調査時現在：山梨県甲府市
E	男性	36	0-19：山梨県甲府市，19-23：埼玉県草加市，23-調査時現在：山梨県甲府市

² 筆者

³ 中央市は甲府市に隣接する地理的に近い地域であることと、話者Cは6歳からの12年間を甲府市で過ごしていることから、今回の調査対象として適切であると考えた。

F	男性	36	山梨県甲府市，東京都練馬区，和歌山県和歌山市，調査時現在：山梨県甲府市
---	----	----	-------------------------------------

調査では、甲府市方言の終助詞「さ」を用いた計 59 の用例⁴を筆者が作成し、それぞれの用例が自然であるか否かを回答してもらった。調査は 4 回に分けて行っており、1 回目の調査では用例 (3) から (47) のうち (33)(34)(41)(42) を除いたものについて、それが話し言葉として自然であるか否かを調査した。「話し言葉として」という制約を設けたのは、話し言葉では文末で用いられにくい共通方言の「さ」との差異を明確にするためである。それでも判断が難しい場合がある⁵と考え「自然」「不自然」の他に「自然だが別の用法である」という選択肢も設けた。ここでいう「別の用法」は共通方言の終助詞「さ」の用法を意図しており、共通方言の終助詞「さ」の用法を示す例として以下の 2 例を筆者が作成し、調査フォームの冒頭に掲載した。

- ・「調子はどう？」「絶好調さ」
- ・「合格おめでとう！」「ありがとう、君のおかげさ」

「自然だが別の用法である」は、「甲府市方言としては判断できない」ということであると解釈し、集計としては「不自然」と同等に扱う。この選択肢を設けて調査することで、甲府市方言としては不自然であるのに共通方言としては自然なために「自然」と回答されてしまう、という事態を防ぎやすくなると考えた。

しかし、1 回目の調査において、(32) から (47) の認識のモダリティを表す形式を含んだ例文では話者の間で判断が分かれるところが多く⁶、この方法がうまく機能していないと考えられた。そのため 2 回目以降の調査では、提示用法と確信用法についてイラストを使って簡潔に説明した上で、「この用法として自然か否か」を回答してもらう形式をとった。選択肢は「自然」「不自然」の 2 つとし、「表現としては自然だがこの用法には感じない」という場合には「不自然」を選択してもらうように変更した。2 回目の調査では、用例 (32) から (47) を再度調査した⁷ほか、用例 (48)(49)(57)(58)(59)(60) について調査した。3 回目では用例 (50A)(50B)(51A)(51B)(52)(61) について調査し、4 回目では用例 (33)(34)(41)(42) について調査した。

本調査は用例の文法的な適格性を調べるものであり、話者個人の使用有無や頻度に関しては問題にしていない。

筆者が作成した 59 の用例および第 4.4 節で示す表 2 について、筆者・調査協力者の全員が

⁴ 次節以降の (3) から (66) までの例文のうち、(53) から (56) 、(62) から (66) を除いたものである。

⁵ 富樫 (2011) で指摘されているように、共通方言の「さ」は役割語としての側面が強く、アニメやドラマでは話し言葉としても現れやすいためである。

⁶ 具体的には、1 回目で調査した 12 個の例文のうち半数以上にあたる (36) から (40) 、(44) から (46) の 8 個の例文において、調査対象者の 5 人の話者の中で判断が割れていた。

⁷ (3) から (31) について再調査を行わなかった理由は、(32) から (47) と異なり 1 回目の調査で判断が割れたところが少なく、調査対象者の負担を考えると 1 回目の調査を利用した方が良いと考えたためである。

「不自然」または「自然だが別の用法である」と答えたものには「*」を付して文法的に不適格であるとし、過半数が「不自然」または「自然だが別の用法である」と答えたものには「?」を付して不適格ではないが不自然であることを表す。結果が拮抗するもの、すなわち過半数の選択肢が存在しないものには「△」を付して許容度に個人差があることを表す。2 回調査を行っている用例および第 4.4 節で示す表 2 については、1 回目と比較して判断が割れた部分が少なかったため、2 回目の調査結果を採用している。なお、4 回目の調査では話者 E から回答が得られなかったため、(33) (34) (41) (42) については話者 E を除いた 5 人の回答に基づいて結果を記している。第 4 節以降の記述は全て、この方法によって行った調査結果に基づく。

4. 形態統語的特徴

第 4 節では甲府市方言の終助詞「さ」の形態統語的特徴について述べる。形態統語的特徴を調べる意義は 2 つある。1 つは、甲府市方言の終助詞「さ」の形態統語的特徴について記述された先行研究が存在しないので、甲府市方言の研究において、終助詞「さ」の特徴を広く記述したものが必要であると考えたためである。もう 1 つは、提示用法と確信用法の間に形態統語的特徴の差異があれば、本稿の問いである「2 つの「さ」は同一形態素か否か」の答えに繋がると考えたためである。

形態統語的特徴として、まず第 4.1 節では甲府市方言の終助詞「さ」の前部要素として生起できる形（主に品詞）について述べ、第 4.2 節では使用できる文タイプについて述べる。第 4.3 節では他の終助詞との共起について述べ、第 4.4 節では認識のモダリティを表す形式との共起について述べる。

4.1. 生起環境

第 4.1 節では、「さ」の前部要素として生起できる形について確認し、提示用法と確信用法とで生起環境に大きな差異は見られないことを示す。

まず、動詞・形容詞との共起について確認する。(3) から (6) は提示用法を、(7) から(10) は確信用法を用いた例文である。

【提示用法】

- | | | |
|-----|----------------------------|-----------|
| (3) | 明日家族で遊園地行く <u>さ</u> | <動詞・非過去> |
| (4) | 昨日家族で遊園地行ってきた <u>さ</u> | <動詞・過去> |
| (5) | 今の時期、仕事がめちゃくちゃ忙しい <u>さ</u> | <形容詞・非過去> |
| (6) | 先週めちゃくちゃ忙しかった <u>さ</u> | <形容詞・過去> |

【確信用法】

- (7) A「今日もバイトあるの？」

- B「あるさ」 <動詞・非過去>
- (8) A「今日ちゃんとバイト行ったの？」
B「行ったさ」 <動詞・過去>
- (9) A「仕事忙しいの？」
B「忙しいさ」 <形容詞・非過去>
- (10) A「旅行楽しかった？」
B「楽しかったさ」 <形容詞・過去>

以上より、提示用法、確信用法ともに、動詞・形容詞にはそのまま後接できることが示せた。
過去形・非過去形は問わない。

次に、名詞・形容動詞語幹との接続について確認する。(11) から (14) は提示用法を、(15) から (18) は確信用法を用いた例文である。

【提示用法】

- (11) △これからバイトさ <名詞・非過去>
- (12) 先週週 5 でバイトだったさ <名詞・過去>
- (13) △この女優さん、すごい好きさ <形容動詞・非過去>
- (14) この女優さん、昔すごい好きだったさ <形容動詞・過去>

【確信用法】

- (15) A「決勝、どっちが勝つかな？」
B「△ブラジルさ」 <名詞・非過去>
- (16) A「握手会、よかった？」
B「もう天国だったさ」 <名詞・過去>
- (17) A「弟さん元気にしてる？」
B「元気さ」 <形容動詞・非過去>
- (18) A「あのモデルに会ったんでしょ？どうだった？」
B「めっちゃくちゃ綺麗だったさ」 <形容動詞・過去>

以上より、提示用法、確信用法ともに、過去形であれば名詞と形容動詞語幹に自然に接続できることが示せた。非過去形については許容度に個人差があるが、内省では過去形・非過去形のどちらも極めて自然に接続できるため、本稿ではこの部分を詳しく分析することはしない。

その他の共起関係として、下記 (19)(20) のように、準体助詞「の」「ん」に接続すること

⁸ 実際には確信用法の全ての用例に関して文頭に「そりゃ」をつけて調査した。これは調査協力者に、これらの用例が確信用法であることを明確に示すためである。

はできないまたは不自然である。また、(21) のように丁寧体に接続することもできない。

- (19) *これからバイトに行くのさ
(20) ?これからバイトに行くんさ
(21) *これからバイトに行きますさ

第 4.1 節では、甲府市方言の終助詞「さ」の前部要素として生起できる形という観点で見ると、提示用法、確信用法ともに大きな差異は見られないことが示せた。「さ」は、動詞や形容詞であれば過去形・非過去形問わず自然に後接でき、名詞や形容動詞語幹であれば過去形には自然に後接し、非過去形への後接には個人差がある。また、準体助詞の「の」や丁寧体には接続することができないまたは不自然であるということも示せた。

4.2. 文タイプ

第 4.2 節では、甲府市方言の終助詞「さ」が使用できる文タイプについて確認する。甲府市方言の終助詞「さ」が自然に接続できる文タイプは、提示用法、確信用法ともに平叙文のみである。(22)(23) のような疑問文や、(24) のような命令文、(25) のような依頼文、(26) のような勧誘文、(27) のような意志を表す文で「さ」を使用するのは不自然である。

- | | | |
|------|-------------------------|----------|
| (22) | ?どこに行く <u>さ</u> ? | <疑問詞疑問文> |
| (23) | *太郎って逆上がりできる <u>さ</u> ? | <真偽疑問文> |
| (24) | ?ちゃんと勉強しろ <u>さ</u> | <命令> |
| (25) | ?ちょっと手伝って <u>さ</u> | <依頼> |
| (26) | ?一緒に行こう <u>さ</u> | <勧誘> |
| (27) | ?今日こそ頑張ろう <u>さ</u> | <意志> |

4.3. 他の終助詞との共起

第 4.3 節では、「さ」以外の終助詞との共起について確認する。提示用法では、他の終助詞が後接することはできないまたは不自然であるが、確信用法では、「よ」「ね」「な」の後接が認められることを示す。

(28) で示すように、提示用法では他の終助詞が後接することはできないまたは不自然である。一方、(29) から (31) で示すように、確信用法では、後接する終助詞として「よ」「ね」「な」が認められる。「な」の後接の許容度には個人差がある。

【提示用法】

- (28) 実は明日からハワイ行くさ { *よ / ?ね / ?な }

【確信用法】

- (29) A「今日もバイトあるの？」
B「そりゃあるさよ」
- (30) A「犯人捕まったの？」
B「うん、カメラに映ってたんだって。そりゃすぐ捕まるさね」
- (31) A「犯人捕まったの？」
B「△うん、カメラに映ってたんだって。そりゃすぐ捕まるさな」

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ; <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/index.html>) で「さよ」「さね」「さな」が、文末において終助詞として使用されていた例を確認すると、それぞれ2例、36例、5例⁹存在した。これらの例は共通方言の「さ」を使ったものであると考えることができ、それらの例と例文 (29)(30)(31) との明確な線引きは難しい。すなわち、終助詞「よ」「ね」「な」が後接しているのが、共通方言の「さ」なのか甲府市方言の「さ」なのかを判断することが容易ではないということである。提示用法と確信用法とで終助詞の後接の仕方に違いが見られるというのは重要な示唆ではあるが、共通方言との判別が難しいという理由から、本稿でその点について詳細に分析することはしない。

4.4. 認識のモダリティを表す形式との共起

第4.4節では、日本語記述文法研究会編(2003)を参考に、認識のモダリティを表す形式との共起について確認する。提示用法の「さ」は、推量や必然性を表す形式とは共起しにくく、証拠性を表す形式とは共起しやすいこと、確信用法の「さ」は、全体として認識のモダリティを表す形式と共起しにくく、必然性を表す形式とのみ自然に共起できることを示す。

認識のモダリティを表す形式との共起についての調査を行おうと考えたのは、共通方言の終助詞「さ」についての先行研究である蓮沼(2015)で、当該形式との共起について調査していたためである。蓮沼(2015)では共通方言の終助詞「さ」と終助詞「わ」との差異を、認識のモダリティを表す形式との共起の仕方の違いから説明している。甲府市方言の終助詞「さ」においても、提示用法と確信用法との差異を、認識のモダリティを表す形式との共起の仕方から説明できる可能性があると考え調査を行った。

具体的には、以下の例文(32)から(47)を使ってこれまでと同様の調査を行った。今回調査した認識のモダリティを表す形式は「だろう」「かもしれない」「にきまっている」「みたいだ」「そうだ(～しそうだ)」「らしい」の6つに、甲府市方言において推量を表す形式である「ら」

⁹ 終助詞の「よ」「ね」「な」が終助詞「さ」の直後に出てくる例を調べた。2021年12月30日時点で、検索結果はそれぞれ108例、52例、22例だったが、その中には、終助詞以外のものや文末ではない位置で使用されていたもの、甲府市方言でも共通方言でもないと考えられるものも含まれていた。本文中に記載した例数は、筆者の判断でそれらを除いたものである。

「ずら」¹⁰を加えた計8つの形式である。なお、認識のモダリティを表す「にちがいない」「はずだ」「ようだ」「そうだ」(伝聞)については親しい人物との会話では用いられにくいと判断し、今回の調査対象には含めていない。推量の「だろう」についても、話し言葉として用いられることは少なく、甲府市方言では「ずら」「ら」が使用されることもあるが、筆者の内省から特に若年層では「ずら」「ら」を使用しない話者もいると考え、念のため調査を行った。

【提示用法】

- (32) ?太郎は来るだろうさ
- (33) *太郎は来るらさ
- (34) ?太郎は来るずらさ
- (35) 実は太郎、明日来ないかもしれないさ
- (36) △太郎は来るにきまってるさ
- (37) パーティーやらないみたいさ
- (38) △太郎、最近忙しそうさ
- (39) 太郎、結婚したらしいさ

【確信用法】

- (40) A「太郎、パーティー来るかな？」
B「?来るだろうさ」
- (41) A「太郎、パーティー来るかな？」
B「?来るらさ」
- (42) A「太郎、パーティー来るかな？」
B「?来るずらさ」
- (43) A「太郎、パーティー来るよね？」
B「*来るかもしれないさ」
- (44) A「太郎、パーティー来るかな？」
B「来るにきまってるさ」
- (45) A「パーティーやるのかな？」
B「?やるみたいさ」
- (46) A「太郎忙しいかな？」
B「?忙しそうさ」
- (47) A「太郎結婚したっけ？」
B「?結婚したらしいさ」

¹⁰ 吉田 (2014) によると推量を「ら」で、のだ推量を「ずら」で表現する。例えば「本を読むだろう」の意で「本を読むら」、「もう出かけるのだろう」の意で「もう出かけるずら」のように使う。例は吉田 (2014) による。

そして、上記 (32) から (47) を用いた今回の調査結果を踏まえて、提示用法・確信用法の「さ」と認識のモダリティを表す形式との共起についてまとめたのが以下の表 2 である。

表 2. 認識のモダリティを表す形式との共起

意味的類型		形式	提示用法	確信用法
推量		だろう	×	?
		ら	×	?
		ずら	?	?
蓋然性	可能性	かもしれない	○	×
	必然性	にきまっている ¹¹	△	○
証拠性	観察	みたいだ	○	?
	推定	そうだ (～しそうだ)	△	?
	推定・伝聞	らしい	○	?

認識のモダリティを表す形式との共起は、基本的には表 2 の通りであるが、表 2 内では△としている提示用法の「さ」と「にきまっている」との共起については、筆者の内省では強い違和感がある。筆者を含む 3 人が不自然とし、それ以外の 3 人が自然と回答しており、結果が拮抗しているため表 2 内では△としているが、内省ではこの表現は許容し難く、提示用法の「さ」と「にきまっている」が自然に共起するとは言い難い。「自然」と回答する人が半数いた理由としては「共通方言や確信用法として『にきまってるさ』という形式が極めて自然に使われる¹²ため、『にきまってるさ』という文字列が極めて自然に思える」ということが考えられる。

表 2 と前の段落の記述から、提示用法の「さ」は、推量・蓋然性を表す形式とは共起しにくく、証拠性を表す形式とは共起しやすいことがわかる。ただし蓋然性の中でも、可能性を表す形式「かもしれない」とは自然に共起できる。一方確信用法の「さ」は、全体として認識のモダリティを表す形式と共起しにくく、必然性を表す形式「にきまっている」とのみ自然に共起できる。

4.5. 第 4 節のまとめ

¹¹ 話し言葉では「にきまってる」の方が適切であると考え、調査ではそのようにして用例を作成した。以後の例文でも「にきまってる」を採用する。

¹² 実際、1 回目の調査でも 2 回目の調査でも、確信用法の「さ」と「にきまっている」との共起を聞く用例 (44)において、調査対象者全員が「自然」または「自然だが別の用法である」を選択している。すなわち、「さ」と「にきまっている」の共起は、確信用法または共通方言の用法として全員にとって自然に感じられるということである。

第4節では、甲府市方言の終助詞「さ」の形態統語的特徴について分析した。他の品詞との共起や使用できる文タイプについては提示用法と確信用法との間では違いはないが、他の終助詞との共起と、認識のモダリティを表す形式との共起については違いがあることがわかった。特に、提示用法の「さ」は認識のモダリティを表す形式の多くと自由に共起できるのに対し、確信用法の「さ」は必然性を表す「にきまっている」としか自然に共起できないということは、それぞれが担う役割が大きく異なることを示唆している。

5. 機能的特徴と語用論的效果

第5節では、提示用法と確信用法それぞれについて、甲府市方言の終助詞「さ」の機能的特徴とそこから導かれる語用論的效果について議論する。この差異が、2つの「さ」が同一形態素であるか否かという問いに直結する。

5.1. 提示用法の機能的特徴と語用論的效果

まず第5.1節では、提示用法の「さ」が持つ機能的特徴と、そこから導かれる語用論的效果について述べる。

5.1.1. 提示用法の機能的特徴

5.1.1では、提示用法の「さ」は「聞き手は認識していないが話し手は認識している情報」について、それを知ってほしいという話し手の心的態度を表す形式であるが、提示用法の「さ」を使用するためには2つの条件を満たしている必要があるということを示す。

提示用法の「さ」によって伝達できる情報には「聞き手は認識していないが話し手は認識している」ということ以外に、以下の2つの前提条件が存在することを主張する。提示用法の「さ」を使用するには、この2つの条件をどちらも満たしている必要がある。

【条件A】話し手が発話時に認識した情報ではなく、発話前に既に認識している情報である

【条件B】話し手が「聞き手はその情報を認識すべきである」とは捉えていない情報である

まず【条件A】について見ていく。(48)(49)に見られるように、提示用法の「さ」によって提示される情報は「発話前に既に話し手が認識している情報」に限られ、「発話時に認識した情報」を提示する際には用いられない。ここでいう「ある命題が発話時に認識されたものである」というのは、Oshima (2014: 444) のいう「命題内容が話し手が談話の中で獲得したものである」(the propositional content is information (belief) that S acquired in the discourse situation) や、野田 (1997: 81) のいう、命題が「話し手の眼前で成立した」ものであるということを指す。

(48) 昨日こっちはすごい雨が降ってたさ

(49) (ふと窓の外を見て雨に気付き) ?おい太郎、雨が降ってきたさ

上記 (48) において、「昨日雨が降っていた」というのは、発話するよりも前に既に話し手が認識している事態である。そのため、「さ」を用いて提示することができる。一方、(49) において「雨が降ってきた」というのは、話し手が既に認識していた事態ではなく、発話時に窓の外を見て認識した事態である。そのため、「さ」を使用するのは不自然である。

次に【条件 B】について見ていく。例えば【条件 A】を満たしているが、(50A)(51A)(52) に見られるような場面では、提示用法の「さ」を使うのは不自然である。一方 (50B) (51B) のような状況であれば、「さ」を自然に使用することができる。

(50A) (聞き手は知らないと想定して)
?お前、昨日ニュースに映ってたさ

(50B) (聞き手は知らないと想定して)
太郎が昨日ニュースに映ってたさ

(51A) ?太郎がきみの鞆勝手に開けてたさ

(51B) 太郎が花子の鞆勝手に開けてたさ

(52) ?大阪行くんだよね?それならこのお店に行くといいさ

上記 (50A) (51A) (52) で話し手が聞き手に対して提示している情報は、話し手が「聞き手が認識すべきである」と捉えている情報である。まず (50A) についてだが、自分の友人などがニュースやテレビ番組などに映っていたら、「そのことを本人は知っていた方が良い」「本人は『教えてほしい』と思うだろう」と考えるのが当然である。これは (51A) でも同様であり、鞆を開けられていた当事者がいたら、そのことを本人に伝えて認識させようとするものである。同様に (52) でも、話し手は、聞き手が大阪に行くということを知ったために、聞き手が認識すべき情報としてお店の情報を与えているといえる。このように、提示用法の「さ」が不自然となる (50A) (51A) (52) で与えられる情報は全て、「聞き手が認識すべきである」と話し手が捉えている情報である。

一方 (50A) (51A) と異なり (50B) (51B) で自然に提示用法の「さ」が使用できるのは、これらの場面で提示している情報が、話し手が「聞き手が認識すべきである」とは捉えていない情報であるためである。聞き手が太郎や花子と特別な関係性を持っているなど、特別な事情がある場合を除けば、話し手は「聞き手にとって『太郎がニュースに映っていたこと』や『花子の鞆が開けられていたこと』は特段認識すべき情報ではない」と考えるのが自然である。そのため、こういった状況では【条件 B】を満たすため、自然に提示用法の「さ」を使用することができるのである。

なお、この点は共通方言の終助詞「よ」と対照的である。野田 (2002:267) では終助詞「よ」

は「聞き手が文の内容を認識すべきだと、話し手が考えていることが表される」としており、McCready (2009: 70) でも「よ」によって表される内容は「聞き手にとって新しく、聞き手が信じるべきものであることを前提としている」(it also presupposes that the content be both hearer-new and something the hearer should believe.) と表現されている。「聞き手にとって新しい情報」を伝達する点は同様だが、その情報が「聞き手が認識すべきものかどうか」という点で甲府市方言の提示用法の「さ」と対照的である。上記の (50A) (51A) (52) においても、提示用法の「さ」の代わりに終助詞「よ」を用いれば、自然な文となる。

下記 (53) (54) のように「さ」と「よ」のどちらも使用できる命題も存在するが、それぞれ想定されうる状況が異なる。

(53) 昨日のパーティー、太郎もいたよ

(54) 昨日のパーティー、太郎もいたさ

上記 (53) では、聞き手が例えば太郎の親しい友人・恋人などで、話し手が「聞き手は、太郎がいたことを知っていた方が良い」と考えた上での発話であると想定される。一方 (54) は単に「太郎もいた」という事実を伝達しているに過ぎず、「聞き手が知っていた方が良い・知るべき」とは話し手は捉えていない。

なお、この【条件 B】は、「聞き手が関与している情報であってはいけない」と考えられるかもしれないが、「関与しているか否か」という基準は曖昧で混乱を招く可能性があるため避ける。同様の議論は、北海道方言の終助詞「さ」に関する先行研究である Tamura et al. (2018) において、松浦・岸本 (2016) の問題点を指摘する形で述べられている。Tamura et al. (2018) が指摘している松浦・岸本 (2016) の問題点とは、Kamio (1997) の「情報のなわ張り理論」に基づき、北海道方言の「さ」は「聞き手の領域外にある情報にしかつかない」と述べているものの、それでは「?(聞き手が) 財布落としてるさ」のような文が不自然であることを説明できないということである。その理由として「聞き手が財布を落としている」という情報は Kamio (1997) のいう「聞き手の領域内の情報」の条件に当てはまらないことなどを挙げている。確かに、「(聞き手が) 財布を落としている」という情報は直観的には聞き手に関与しているように思えるが、情報の所在を聞き手と話し手の領域という概念を用いて詳細に述べている Kamio (1997) における基準を用いると、Tamura et al. (2018) の述べるように「(聞き手が) 財布を落としている」という情報は聞き手の領域外に当てはまる。以上の理由より、聞き手の関与という基準を用いると、直観と先行研究で用いられている概念との間に齟齬が生じてしまうため、「聞き手が認識すべき情報かどうか」という基準を採用した方が良いと考えた。

5.1.2. 提示用法の語用論的効果

5.1.2 では、5.1.1 で主張した提示用法の「さ」の機能的特徴をもとに、提示用法の「さ」が持つ語用論的効果について述べる。5.1.1 では、提示用法の「さ」は、話し手が「聞き手はその情

報を認識すべきである」とは捉えていない情報を伝える際に用いると述べた。すなわち、提示用法の「さ」は聞き手が特段認識する必要はない情報を伝えるものである。そのような情報をわざわざ提示するのであるから、話し手は「どうしても知る必要はないけれど、ぜひ知ってほしい」と考えて伝達していると考えられる。ここから、以下の (55) や (56) のように「(聞き手の知らない) エピソードの披露」や「告白」といった用法に使われやすいといえる。

- (55) 先週ハワイ行ってきたさ <エピソードの披露>
 (56) (ホラー映画の話になって)
 俺、怖い好きじゃないさ <告白>

(55)においては、「話し手がハワイに行ってきた」という情報は、聞き手もハワイに行く予定があるので情報提供をしようなどという場合は除くが、通常聞き手にとっては特段認識すべき情報ではない。(56)においても、通常「話し手が怖いものを好きではない」という情報は聞き手にとっては特段認識すべき情報ではない。

(55)(56) のように「エピソードの披露」や「告白」のような使われ方をした場合には、聞き手は提示された情報に対して何らかの感想(「驚き」「賞賛」「同情」「共感」など)を述べることが期待され、これが提示用法の持つ語用論的效果といえる。例えば (55) のように自慢に近いようなエピソードの披露であれば、それを聞いた聞き手は驚きや羨望の感想が発露するのが自然である。(56) のような告白であれば、驚きのほか、場面によっては同情・心配などの感想が聞き手に期待される。

ここで、提示用法の「さ」の語用論的效果をより明確に記述するために、5.1.1 で触れた共通方言の終助詞「よ」の語用論的效果についても見ておく。提示用法の「さ」と対照的に「聞き手が認識すべき情報」を伝える共通方言の終助詞「よ」は、Takubo and Kinsui (1997: 756) で「命題の内容を知らせるというよりも、推論を引き起こすために使われる」(yo is used to trigger inferences rather than imply to inform the content of the proposition.) と述べられている。「雨が降っているよ」のような文では、「傘を持って行きなさい」など、今後の行動を指示するために使われたり、「ピクニックは中止になる」など、命題から導き出される結論を通知するために使われたりすると述べられている。

提示用法の「さ」に、このような推論を引き起こす効果はない。(55) や (56) のような情報を提示しても、話し手は、聞き手のその後の行動に指示を与えたりその情報から導き出される結論を通知したりすることはない。あくまでも、その情報を提示することで、聞き手から何らかの反応や感想を期待しているだけなのである。

5.2. 確信用法の機能的特徴と語用論的效果

続いて第 5.2 節では、確信用法の「さ」が持つ機能的特徴とそこから導かれる語用論的效果について述べる。

5.2.1. 確信用法の機能的特徴

5.2.1 では、確信用法の「さ」は、ある事態に対する話し手の「その成立は当然である」という認識と、そのことを聞き手に認識させようという心的態度を表す形式であり、認識のモダリティと伝達態度のモダリティの2つの機能を担う形式であるということを主張する。そして確信用法の「さ」を使用するためには2つの条件を満たしている必要があるということも示す。

確信用法の「さ」によって伝達できる情報には、以下の2つの前提条件が存在することを主張する。確信用法の「さ」を使用するには、この2つの条件をどちらも満たしている必要がある。

【条件A】話し手が発話時に認識した情報ではなく、発話前に既に認識している情報である

【条件C】話し手が、聞き手の発話によって、「聞き手は話し手よりもその成立に対して抱く確信が弱い」と捉えている情報である

まず【条件A】については提示用法の「さ」を使用するための【条件A】と全く同じものである。確信用法の「さ」が使用できるのは「発話前に既に話し手が認識している情報」に限られ、「発話時に認識した情報」を提示する際には用いられない。これを (57) (58) で示す。

(57) A「台風だったけど雨すごかった？」

B「すごかったさ」

(58) A「今雨降ってる？」

(B がふと窓の外を見て雨に気付く)

B「?降ってるさ」

(57) と (58) の対比は5.1.1における (48) と (49) の対比と同様である。(57) において「雨がすごかった」というのは、発話するよりも前に既に話し手が認識している事態であるため、「さ」を使用することができる。一方、(58) において「雨が降っている」というのは、話し手が既に認識していた事態ではなく、発話時に窓の外を見て認識した事態である。そのため、「さ」を使用することができない。

次に【条件C】について見ていく。確信用法の「さ」は (59) のような単独の発話是不自然であり、(60) のように、聞き手の確信度合いが話し手の発話前に表出している必要がある。

(59) (テレビドラマを見ていて、一緒に見ている聞き手に対して)

太郎が犯人 {?さ／にきまってる／にきまってるよね}

(60) (テレビドラマを見ていて)

A「太郎が犯人かなあ」

B「そう {さ／にきまつてる／にきまつてるよ}」

また、(61) のように独話で使用することもできない。

(61) (運ばれてきた料理に対して、独り言で)

美味しそう。エビとトマトなんて、美味い {?さ／にきまつてる}

確信用法の「さ」が単にある情報に対する確信の強さを表すだけであれば、(59) や (61) のような発話もできるはずである。(59)(61) が不自然なのは、これらが聞き手を無視した表現だからである。確信用法の「さ」を用いた「X さ」という表現は、話し手の持つ情報 X に対する絶対的な確信の強さを表出するものではなく、聞き手と比較したときの相対的な確信の強さを提示し、聞き手に認識してもらおうというものである。

ここから、確信用法の「さ」の機能は、ある情報に対して自分の持つ相対的な強い確信という認識の表出と、それを聞き手に認識させようという伝達の 2 つであると分析できる。つまり、確信用法の「さ」は認識のモダリティと伝達態度のモダリティの両方の機能を持つのである。

確信用法を使用するのに必要な条件は以上の【条件 A】【条件 C】の 2 つであるが、最後に、提示用法の「さ」を使用するための【条件 B】に関連して「話し手が「聞き手はその情報を認識すべきである」と捉えている情報かどうか」という観点を考えておく。提示用法の使用に必要な【条件 B】とは、以下の通りであった。

【条件 B】話し手が「聞き手はその情報を認識すべきである」とは捉えていない情報である

結論としては、確信用法の「さ」は提示用法の「さ」とは対照的に「話し手が『聞き手はその情報を認識すべきである』と捉えている情報」にしか使うことができない。しかしこれは【条件 C】から自然に導かれるものであるため、条件として明記はしないこととする。すなわち【条件 C】が成立しているとき、話し手が提示する情報は、話し手にとって「聞き手は認識すべきである」ものなのである。このことを、確信用法の「さ」を使った (62) を例にとって考える。

(62) (B が着ている服に対して)

A「その服高かった？」

B「高かったさ」

上記 (62) では、「B が着ている服が高かったかどうか」を A は気にしているということがわかる。客観的には B の服の値段は通常 A にとってどうでも良いことであるが、それを A が気にしているということが表出している以上、その答えは「A が認識すべきこと」であるといえる。このことから、(62) のように客観的には聞き手が認識すべきとはいえない例であっても、【条

件 C】が成立して聞き手が命題の成立について弱い確信を表出している状況であれば、それは話し手にとっては「聞き手が認識すべきこと」となるため、確信用法の「さ」は問題なく使えるといえるのである。

5.2.2. 確信用法の語用論的效果

5.2.2 では、5.2.1 で主張した確信用法の「さ」の機能的特徴をもとに、聞き手の持つ確信度合いの表出の仕方の違いによって、異なる語用論的效果が現れることを示す。

5.2.1 では、確信用法の「さ」には、聞き手の確信度合いが話者と比較して相対的に低いことを知り、聞き手に対して話者が強い確信を抱いていることを示すという機能があることをみた。「ある命題 X の成立に対する確信度合いの低さ」というのは、(63) のように表出することもあれば、(64) のように表出することもある。

(63) A「これ床に置いてもいい？」

B「いいさ」

(64) A「これ床に置いてもいい？」

B「ダメさ」

上記 (63)(64) において、A は「床に置いてもいい」ということに対しての確信度合いを表現しているが、それに対する B の返答の仕方が (63) と (64) とで異なっている。(63B) では (63A) と同じく「床に置いてもいい」ということに対しての強い確信を表しているため、B の確信の表出は A の発話に対して直接的といえる。一方、(64B) は「床に置いてはいけない」ということに対しての強い確信を表しており、その命題は (64A) で A が確信度を表現している命題を否定したものであるから、B の確信の表出は (63) と異なり、間接的であるといえる。

(64) のような状況で確信用法の「さ」が使われると、聞き手からすると、自分の認識が否定され、正反対の情報を提示されたことになるため、非難や嘲笑のニュアンスを含むこともある。一方で (63) のような状況では、悩んだり判断に迷っていたりする聞き手に対して、その認識が正しいことを示すため、後押しや聞き手を安心させるニュアンスを含むこともある。これらのニュアンスの表出が確信用法の「さ」が持つ語用論的效果である。

5.3. 第 5 節のまとめ

第 5 節では、甲府市方言の終助詞「さ」の機能的特徴とそこから導かれる語用論的效果について分析した。提示用法の「さ」は、「聞き手は認識していないが話し手は認識している情報」について、それを知ってほしいという話し手の心的態度を表す形式であり、「聞き手が認識すべき情報であるか否か」という観点で共通方言の終助詞「よ」と補完的であるということを主張した。またそこから、聞き手に対して推論を引き起こすという効果は持たず、何らかの反応や感想を期待するという語用論的效果が生まれることも分析できた。

確信用法の「さ」は、ある命題に対する話し手の「その成立は当然である」という認識と、そのことを聞き手に認識させようという心的態度を表す形式であり、その「当然である」という強い確信は絶対的なものではなく、必ず聞き手と比較したときの相対的なものである必要があるということを主張した。また、その確信の表出の仕方によって、非難や嘲笑などのネガティブなニュアンスを含むこともあれば、後押しや安心させるなどのポジティブなニュアンスを含むこともあるということも分析できた。

6. 提示用法と確信用法の共通点・相違点

第6節では、第4節と第5節での議論を踏まえて、甲府市方言の終助詞「さ」の提示用法と確信用法の共通点と相違点についてまとめる。そしてその上で、最終的に提示用法と確信用法の「さ」は異なる形態素であるということを示す。

6.1. 形態統語的特徴の共通点・相違点

第6.1節では、提示用法の「さ」と確信用法の「さ」の形態統語的特徴における共通点と相違点についてまとめる。提示用法の「さ」と確信用法の「さ」の形態統語的特徴の共通点は、「さ」の前部要素として、動詞、形容詞、名詞、形容動詞語幹が接続できるという点である。どちらも、「よ」や「ね」などの共通方言の他の終助詞が持つような特徴を有しているといってい

良いだろう。

しかし、他の終助詞が後接できるか否かや、認識のモダリティを表す形式との共起には両用法間で違いがある。第4.3節で見たように、他の終助詞との共起については共通方言の「さ」との線引きが難しいためここでは詳細な議論を避けることとし、認識のモダリティを表す形式との共起について相違点を再確認しておく。以下に表2を再掲するが、提示用法の「さ」は認識のモダリティを表す形式の多くと自由に共起できるのに対し、確信用法の「さ」は必然性を表す「にきまっている」としか共起することができない。

表2. 認識のモダリティとの共起（再掲）

意味的類型		形式	提示用法	確信用法
推量		だろう	×	?
		ら	×	?
		ずら	?	?
蓋然性	可能性	かもしれない	○	×
	必然性	にきまっている	△	○
証拠性	観察	みたいだ	○	?
	推定	そうだ	△	?

		(～しそうだ)		
	推定・伝聞	らしい	○	?

この、認識のモダリティを表す形式との共起の違いについては、次の第 6.2 節で機能的特徴の相違点を述べる際にもまた参照することとする。

6.2. 機能的特徴の共通点・相違点

第 6.2 節では、提示用法の「さ」と確信用法の「さ」の機能的特徴における共通点と相違点についてまとめる。第 5 節を踏まえて、提示用法の「さ」と確信用法の「さ」の機能的特徴に共通する点は以下の 3 つであると分析することができる。

- (ア) 聞き手に情報を提示する
- (イ) 提示する情報は、話し手が発話前に既に認識している情報である
- (ウ) 提示する情報は、聞き手が全くあるいは完全には認識していない情報である

一方で、大きな相違点としてモダリティの性質の違いと提示する情報に対する態度の違いが挙げられる。提示用法の「さ」は情報を単に提示するだけであるが、確信用法の「さ」はその情報に対する強い確信という認識を表した上で、それを聞き手に提示するものである。

この相違が明確にわかるのが、第 6.1 節でも示した、認識のモダリティを表す形式の共起の違いである。例として、推定・伝聞を表す形式である「らしい」との共起について確認する。下記 (65) (66) ((39)(47)を再掲) からわかるように、提示用法の「さ」は「らしい」と自然に共起できるのに対し、確信用法の「さ」は共起できないあるいは不自然である。

(65) 太郎、結婚したらしいさ ((39)を再掲; 提示用法)

(66) 「太郎結婚したっけ?」「?結婚したらしいさ」((47)を再掲; 確信用法)

ここで、推定・伝聞の「らしい」とは「他者から得た情報を証拠として、未知の事柄を推定する」(日本語記述文法研究会編 2002) 形式である。そのため、情報に対する強い確信を表す確信用法の「さ」と共起しないのは当然であるが、そのような不確かな事柄であっても、その事柄に対する話し手の認識を示さずに聞き手に提示できるのが提示用法の「さ」なのである。

この点は、提示用法の「さ」が「かもしれない」「みたいだ」と自然に共起することからも説明できる。提示用法の「さ」は、話し手の経験などの確かな情報であっても、「らしい」「かもしれない」などが付随した不確かな情報であっても、その確かさにかかわらず聞き手に伝えることができるのである。その事柄に対する話し手の認識は特に示さず、単に聞き手に提示するという役割だけを担うのが提示用法の「さ」であるといえる。

6.3. 提示用法と確信用法の「さ」は同一形態素か

第 6.3 節では、第 6.1 節および第 6.2 節の内容を踏まえて、提示用法の「さ」と確信用法の「さ」は異なる形態素であるということを主張する。この主張の根拠は 2 つある。1 つは、2 つの用法間には同一形態素の関連する意味であると認めるに値するほどの関連性が見られないということ、もう 1 つは 2 つの用法間に明確な相違点が存在するということである。

第一の根拠は、2 つの用法間に同一形態素の関連する意味であると認めるに値するほどの関連性が見られないということである。例えば共通方言の終助詞「よ」についての先行研究である Oshima (2012: 52) は、「上昇調の「よ」と下降調の「よ」には、いずれも聞き手の義務に関わるという共通性があり、この共通性は「よ」の 2 つの異なる用法間の概念的なつながりとして捉えることができる」(the proposed discourse functions of yo^{\uparrow} and yo^{\downarrow} are both concerned with the hearer's duties. This commonality can be taken as a conceptual link between the two distinct uses of yo .) と述べている。提示用法の「さ」と確信用法の「さ」に、そのような用法間の意味のつながりが存在するとはいえない。

もちろんこれまで見てきたように、2 つの用法に共通する部分は存在する。第 6 節で見てきた提示用法と確信用法の「さ」の共通点は、以下の通りであった。

<形態統語的特徴の共通点>

動詞、名詞、形容詞、形容動詞語幹と自然に共起する

<機能的特徴の共通点>

- (ア) 聞き手に情報を提示する
- (イ) 提示する情報は、話し手が発話前に既に認識している情報である
- (ウ) 提示する情報は、聞き手が全くあるいは完全には認識していない情報である

しかし、これらの共通点をもとに提示用法と確信用法が同じ形態素であるということとはできない。まず、形態統語的特徴の共通点である、動詞、名詞、形容詞、形容動詞語幹と自然に共起するという点は、例えば共通方言の終助詞「よ」「ね」などにも当てはまる共通点であり、終助詞一般に存在する普遍的な特徴であるといえる。特にこの 2 つの用法だけにあてはまるわけではない。この性質から甲府市方言の 2 つの「さ」が持つ固有の特徴に派生したとは考えにくい。

さらに、どちらの用法にも当てはまる抽象的な意味を設定することはできるだろうが、その意味は「さ」固有のものであると言い難く、さらにその意味からどのように提示用法と確信用法の 2 つの意味に派生したのかを説明することは難しい。例えば、機能的特徴の共通点から「聞き手が認識していない情報を提示する」のように抽象的な意味を設定したとしても、それは甲府市方言の「さ」以外の終助詞にも当てはまる普遍的な性質であるといえる。そもそも聞き手に情報を提示するということは対話において当然の行為であるし、その情報を聞き手が認

識していないということも多い。したがって、提示用法と確信用法に共通する抽象的な意味を設定することは難しい。たとえ「聞き手が認識していない情報を提示する」のような抽象的な意味を設定したとしても、この抽象的な意味から、第5節で議論した提示用法と確信用法が持つ固有の意味にどのように派生したのかを説明するのは非常に難しい。

機能的特徴の共通点の(イ)については、情報を話し手が認識した時点によって使用が制限されるという点で、他の終助詞には見られない特異な性質であるといえる。しかし、これまで見てきたように、この特徴は2つの「さ」の中心的な性質とはいえない。共通点(イ)は「さ」の中心的な意味ではないから、そこから派生して提示用法と確信用法の意味ができたとは考えにくい。

第二の根拠は、2つの用法間に明確な相違点が存在するという点である。第6節では、提示用法の「さ」が情報に対して何の認識も示さずに単に聞き手に提示するという役割を担うのに対し、確信用法の「さ」は情報に対して聞き手と比較した際の相対的な強い確信という認識を示した上で、それを聞き手に提示するという役割を担っているということを分析した。これは、モダリティの性質の違いとも、提示する情報に対する話し手の態度の違いとも捉えることが可能である。この違いが、2つの用法間に存在する明確な相違点である。

ここまで、2つの用法間に見られる共通点からは、同一形態素であると認めるに値するほどの関連性が見られないこと、そしてモダリティの性質および提示する情報に対する話し手の態度の違いという大きな相違点が存在するという点を示した。この2つの根拠から、本稿では提示用法の「さ」と確信用法の「さ」は異なる形態素であると考えるのが妥当であると結論づける。

7. おわりに

本論文では、山梨県甲府市方言の終助詞「さ」の2つの用法についてその特徴を調査・記述した。そして、2つの用法間に、同一形態素であると考えるに値する関連性や意味のつながりが見られないことと、モダリティの性質および提示する情報に対する話し手の態度の違いが存在することから、2つの「さ」は異なる形態素であると考えるのが妥当であると示した。

本稿が取り扱った現象は、全く異なる用法を同音の「さ」で示しているという点が興味深かったが、本稿の分析としては、両者を同一形態素とは見なすことができないという結論に至った。甲府市方言に異なる2つの終助詞「さ」が存在するという今回の研究結果は、甲府市方言の終助詞研究に対して大きな貢献となるだけでなく、類似した用法を持つ他地域の終助詞「さ」や共通方言の終助詞「さ」の研究にも役立つであろう。

参考文献

- Kamio, Akio (1997) *Territory of Information*. Philadelphia: John Benjamins.
- McCready, Eric (2009) Particles : Dynamics vs. Utility. In Yukinori Takubo, Tomohide Kinuhata, Szymon Grzelak, and Kayo Nagai (eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, 16:466–481. Stanford: CSLI

Publications.

- Oshima, David Y (2012) The Japanese particle *yo* in declaratives: Relevance, priority, and blaming. In Manabu Okumura, Daisuke Bekki, and Ken Satoh (eds.), *New Frontiers in Artificial Intelligence: JSAI-isAI 2011 Workshops, LENLS, JURISIN, ALSIP, MiMI, Takamatsu, Japan, December 2011, Selected Papers*, 40–53. Heidelberg: Springer.
- Oshima, David Y (2014) On the Functional Differences between the Discourse Particles *Ne* and *Yone* in Japanese. *Proceedings of the 28th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, 442–451.
- Takubo, Yukinori and Satoshi Kinsui (1997) Discourse Management in Terms of Mental Spaces. *Journal of Pragmatics*, 28: 741–758.
- Tamura, Sanae, Toshio Matsuura, and Yoshihisa Kishimoto (2018) On Sentence-final Particle *Sa* in Hokkaido Japanese. In Shin Fukuda, Mary Shin Kim, and Mee-Jeong Park (eds.), *Japanese/Korean Linguistics*. 25. Poster Papers. Stanford: CSLI Publications.
- 富樫純一 (2011) 「終助詞「さ」の本質的意味と用法」『日本文学研究』50: 150–138.
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4 第8部モダリティ』東京：くろしお出版.
- 野田春美 (1997) 『「の（だ）」の機能』東京：くろしお出版.
- 野田春美 (2002) 「終助詞の機能」『新日本語文法選書4 モダリティ』261–288. 東京：くろしお出版.
- 蓮沼昭子 (2015) 「終助詞「さ」の本質的機能：認識的モダリティとの共起関係に着目して」『日本語日本文学』25: 1–27.
- 藤原与一 (1985) 『方言文末詞〈文末助詞〉の研究（中）』東京：春陽堂書店.
- 松浦年男・岸本宜久 (2016) 「北海道方言における文末詞「サ」の分布と意味」『北海道方言研究会会報』93: 1–8.
- 嶺田明美 (2005) 「山梨県甲府市および中巨摩郡の若年層が用いる「ジャン」の実態報告」『学苑』773: 53–58.
- 吉田雅子 (2014) 「山梨県甲府市方言」『全国方言文法辞典資料集(2)活用体系』53–65.

Two Uses of the Sentence-final Particle *Sa* in the Kofu Dialect of Yamanashi Prefecture

Sumire Mizuishi
smrst06@gmail.com

Keywords: Kofu dialect, sentence-final particle, *sa*, presentation, confirmation

Abstract

The sentence-final particle *sa* in the Kofu dialect of Yamanashi Prefecture has two uses: (a) presentation and (b) confirmation. This paper describes the morphosyntactic, functional, and pragmatic features of each use and examines their similarities and differences. It further argues that the two *sas* are best analyzed as different morphemes. Evidence comes from the fact that there is no semantic commonality between the two *sas* that would suggest they should be treated as a single morpheme and that there are clear semantic and pragmatic differences between them.

(みずいし・すみれ)